

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

## セ ン タ ー 通 信

第 16 号  
2022. 3. 15江戸川乱歩とレジス・メサック——  
『探偵小説』の考古学』を刊行して

石 橋 正 孝

二〇一八年二月のことだった。国書刊行会の編集者からメールが届き、「レジス・メサックの作品集の刊行を企画しており」、かつて牧神社から出版された「全3巻の全集」に収録された小説作品はもちろん、「Detective Novel」などの評論も含めた作品集が編めればと考えて」いるので、協力してもらえないか、という。迂闊なことにメサックと聞いても咄嗟にはなんのことかわからず、検索をかけて邦訳版の表紙に見覚えがあることに気づいたものの、すでに大きな翻訳を複数抱え、あまり気が進まない。とはいえ、「Detective Novel」などの評論」には心が動くものを感じた。無知の上塗りをすれば、博考の影響」をメサックが一九二九年に

上梓していたことなど、この時までまったく知らなかった。一九二九年といえ、最後のシャーロック・ホームズ譚が発表された翌年に当たる。近代法医学の祖とされるエドモン・ロカールが刑事捜査の観点から探偵小説に注目した著作をその頃（一九二四年）に発表した事実だけはかろうじて承知していたものの、純粹に文学的観点からこのジャンルを論じた例として極めて先駆的なのは疑いがない。作品集はさすがに難しいにせよ、この著作単独であれば、そして監訳という形であれば、協力できなくもないだろう……要するに、原著を手にしたこの時点でもまだかなり及び腰だった。

目の色が変わったのは、本研究センターにて、江戸川乱歩が作成させた本

## 目 次

江戸川乱歩とレジス・メサック——『探偵小説』の考古学』を刊行して

石 橋 正 孝

文学者も船をチャーターしてまで島に渡る、のだ

野 中 健 一

あるときは「お兄ちゃん」、あるときは「のん先生」

末永芽久・野中健一

〈プロバビリティー〉の葉書

影 山 亮

『新青年』研究後悔記』講演会 感想

村 松 まりあ

## 〈資料紹介〉

旅する乱歩（統別府編）

丹 羽 みさと

乱歩の旅行・昭和一〇年〜一一年、九州放浪の旅

王 羽 萌

江戸川乱歩賞贈呈式 所感

塩 井 祥 子

江戸川乱歩賞&amp;日本推理作家協会賞贈呈式・トークイベント

王 羽 萌

## 〈編集後記〉

書の「下訳ノート」を前にした時である。晩年の乱歩が「世界各国の、まあ、英米をはじめとして、欧州の小国から、日本をも加えた、比較探偵小説史」（『文壇よもやま話』上、中公文庫）を構想し、そのベースとして本書を「下訳」させた事実は、松村喜雄「怪盗対名探偵」に詳述されており、まったく知られていなかったわけではない。もともと私自身は、乱歩にとって従妹の息子である松村のこの著作に何度か目を通していたにもかかわらず、企画打ち合わせの場で編集者からこの経緯を聞かされた時には、びっくり初耳だと思っ

た。実際に「下訳ノート」の閲覧可否を本研究センターに問い合わせたのは、翻訳作業が始まった二〇一八年十一月だった。しかし、この段階でそれは平井家寄託資料に埋もれていたらしい。該当資料は見当たらずとの回答で、こちらがそろそろ忘れかけていた翌年四月になり、まったく思いがけず、それらしき資料が見つかったという連絡をいただいた。B5判横書きの大学ノート四十三冊、その一冊目の表紙には「探偵小説史／メサック著」とあり、見開きの右頁に本文の訳が、左頁に原注と訳注が青インクで書き込まれている。赤鉛筆による乱歩の書き込みはあまり多くない。その代わり、彼が頁をめくった際の指の跡が生々しい。

乱歩とメサツクの出会いは、フランソワ・フォスカ『探偵小説の歴史と技巧』の翻訳に序文を寄せるよう乱歩が頼まれた一九三八年十月に遡り、同書でフォスカが参照しているメサツクの著作に興味を惹かれた乱歩は、「フランス語が読めもしないのに」（評論家ヘイクラフト）、アテネ・フランセの書籍部を通じて取り寄せたのであった。そして一九四四年一月、仏印へ行くこととなった松村喜雄に饒として贈られた原書は、敗戦後しばらく経った一九四六年五月末、ようやく引揚船に乗り込むことのできた松村の手で日本に持ち帰られ、乱歩に返却される。原書の入手から下訳作成までのこの約二十年の間に、乱歩がまったく手を拱いていたわけではない。語学に堪能であったメサツクによる引用は、出典が英仏伊西希羅各語の場合、原文のままであることが多い上に、しばしば長文で読むことが乱歩にも可能であり（一つの歴史的考察）、その前後の議論をある程度までは推測できたのだ。だが、そのためかえて、隅々にまで目を通したいという渴望は募つたに違いない。

エッセイ「一つの歴史的考察」において乱歩は青年時代の読書を振り返り、自分が「普通文学の多くのもの」に含まれる「推理趣味」だけに「ことさら惹かれる性格」の持ち主であり、「少年時代に読んだ涙香もの」のごとき「家庭スキャンダルに多くの頁」を費やした「なまめい推理小説」よりも、「推理趣味」の濃度が高い「ポー、ドイル、チェスタトン」に出会って「狂喜した」という。すでに推理小説がジャンルとして成立した後の多くの「ミステリマニア」とは異なり、乱歩がまずは「普通文学」の広範な教養を身につけていたこと。そういう乱歩にとっては、ポー以前は元より、実はポー以後に関しても、謎解きに（凝縮）ではなく「専門分化」した推理小説に含まれる「推理趣味」より、「普通文学」に含まれる「推理趣味」の方が興味をそえられる対象であった可能性が高いこと。したがって、彼のいう「世界探偵小説史」とは、ポー以前を「未発達」の前史とし、もっぱらポー以後の「発達」を追う底の進歩史観からは程遠く、彼自身を惹きつけてやまないタイプの「推理趣味」を明確に把握するための方法として、その来し方を捉え直すことを企図したものであり、「推理趣味」それ自体はなんら発展せず、最初から

最後まで一貫していると考えられていたであろうこと。メサツクの博士論文が乱歩にとつて持っていた意味を理解するには、以上の三点が重要であるように思われる。

言い換えれば、件の博士論文を、そのうした「世界探偵小説史を書くときの資料に使うつもり」（ポー講演の資料について）に乱歩がなった理由として、メサツクを知る数年前に彼が到達していた探偵小説の定義——「探偵小説とは難解な秘密が多かれ少なかれ論理的に徐々に解かれて行く経路の面白さを主眼とする文学である」（『鬼の言葉（その三）』）——にメサツクの定義がほぼ一致していた事実は大きいにせよ、それだけでは不十分なのである。

この定義はあくまで「推理趣味」の必要条件にすぎず、様々に異なるはずの十分条件こそ、明らかにされなければならぬ主眼であったはずだ。ポー以前の「普通文学」はそれらの土壌にほかならず、メサツク著を「探偵小説史」と呼んでいたことに明らかとおりのその「下訳」に乱歩が期待したのもまた、ポー以前の文学的土壌から「推理趣味」を抽出した資料集にすぎなかった。事実として乱歩は、一九五八年暮れから断続的に受け取り始めた「下訳」

（早稲田大学教授の鈴木幸夫の紹介で、同大学院博士課程の平岩香魚子に依頼）が、同じ年の十月上旬に第四部まで完成するや否や、十月下旬にはその内容をいわゆる「砂時計型」史観——謎物語、悪漢小説、恐怖小説がポーによつて凝縮され、次いでそれぞれ純推理小説、ハードボイルド、サスペンスに再拡散していく——にまとめ上げ、その後を受け取った第五部第三章から最終第六部第一章までのノートに読まれた痕跡が皆無なのは、乱歩のよく知る「なまめい推理小説」に類する作品を扱っているせいだろう。しかしながら、メサツクにとつて重要であった「科学的思考」とは「民衆的思考」の謂であつて、その鍵を握るメディア（観相学的発想を含む）が主題的に論じられているがゆえに『パサージュ論』のヴァルター・ベンヤミンが注目した部分こそ、この面における「下訳」の十分さも手伝つて乱歩が読み飛ばした部分だった（観相学に関する第三部第一章にも痕跡が皆無なのは、その意味で象徴的である）。完訳の上梓から半年を経たいま、それを乱歩が読み取っていた場合に書かれていたかもしれない「世界探偵小説史」に夢をめぐらせている。